

諫早税務署管内租税教育推進協議会 会長賞

長崎県立 西陵高等学校 一年 中里 玲菜

『日本の税について』

「うちは子供が四人もいる。児童手当とか医療費の支援があって本当にありがたかったよ。」と母が何気なく言ったその言葉が、私が初めて税金って何か役立っているのかなと思っただけだった。

私は四姉妹の末っ子でこれまで家族の会話の中で、税金について深く考えることはあまりなかった。姉たちがそれぞれ大学や高校に進学していく姿を見てきて、進学にはお金がかかるけれど、奨学金や授業料の減免制度など、公的な支援があることを知った。それらはすべて、税金を財源としていると知って驚いた。私は当たり前のように制服を着て学校に通っているけれど、それを支える仕組みの一部に税金があるという事実には、これまで気づいていなかった。

また、幼い頃に風邪を引くたびに家の近くの病院に通っていたが、診察代が安くて済んだのは、子供の医療費が支援されていたからだということの後になって母から聞いた。病院の建物も、お医者さんや看護師さんたちの給与も、医療機器も、税金によって支えられている部分が多いということを知り、私たちの命や健康を守るために税金が使われていることの大切さを感じた。

「税金」とられるお金」と思っていた時期もあったが、学校、病院、道路、そしてごみ収集も、税金がなければ成り立たない。最近では災害対策や防犯カメラの設置、少子化対策などにも使われていて、ますます私たちの生活に直結しているのだと分かってきた。とはいえ、ニュースでは税金の無駄遣いとされる話題もたびたび目にする。それを見ると、納税してくれている人たちに申し訳ないような気持ちになる。だからこそ、私たちの世代が「税金はどのように使われているのか」ということに関心を持つことがこれからの社会には必要なことだと思う。

将来私も働くようになり、今まで以上に様々な税金を納める立場になる。その時に「ただとられているお金」ではなく、「社会を支えるために役立っているお金」だと前向きにとらえられるように、今のうちから税の役割や目的についてしっかり学んでおきたい。そしていつか、誰かの役に立つために働き、税金を通じて支える側になりたいと思う。